様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０１７２２

研究課題名（和文）応援団のエスノグラフィー　-バンカラ文化と近代日本の身体表象-

研究課題名（英文）Ethnography of Ouendan Bankara culture and Corporeal Representation of Modern Japan

研究代表者
瀬戸　邦弘（SETO, KUNIHIRO）

鳥取大学・教育支援・国際交流推進機構・准教授

研究者番号：４０４３４３４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代学校空間において創られ/護られてきた日本人の身体観を考察するためにバンカラ応援団の存在に注目し、全国に点在/継承される応援団文化の参与観察を実施し「日本人の身体観の形成とその表象」に関する資料収集とその解明を目指した。本研究では日本各地に残るバンカラ応援文化の抽出の為に岩手県、石川県、東京都、鳥取県、福岡県、大分県などで参与観察を実施し「応援歌練習、運動会応援合戦、夜間80km行軍、野球応援、相撲応援」など、各地で継承されるバンカラ応援団に特徴的な行事の調査を進め、その文化的意味や価値の抽出を行い、近代日本人像形成を紐解くための貴重な資料を得る事となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では学校空間を通して創られ/護られてきた日本人の身体観を、応援団文化に注目しながら考察し「近代日本の身体とその記憶」を明らかにした。また、その成果を基に体育・スポーツ科学における身体研究を促進し「日本人像の形成過程」の解明を目指すものとなる。本研究の成果はすでに「応援団研究序説 構築される日本文化としての応援団」『スポーツ人類学の世界 早稲田の窓から』(虹色社)や「高校応援団の現在 応援歌練習、運動会にみる自治と伝統文化の継承」(日本体育学会第70回大会 発表)など研究レベルで、また「「応援団は男」今は昔 九州3大学に女性団長」(西日本新聞 2019)やHPを介して社会に還元されている。

研究成果の概要（英文）：In this study, I researched the culture of modern schools, in particular I focused on Bankara Oendan culture. I collected nationwide data about Oendan using videos and photos and the data has been archived for research. The surveys were done in various prefectures in Japan (Iwate, Ishikawa, Tokyo, Tottori, Fukuoka and Oita). In order to identify the characteristic elements of Bankara Oendan culture, I visited the schools and recorded practices such as the cheer leaders school song, sports day cheering competitions, 80km marches at night, baseball cheering and sumo cheering. Finally, I could get good information about how students feel about themselves, their school culture, and how they fit in Japanese society.

研究分野：スポーツ文化人類学

キーワード：応援団文化　主客同一　体育会文化　日本人　日本文化論　利他主義　身体表象　スポーツ人類学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

応援団といえば伝統に重きを置く傾向が強く、そのために世間から“注目”されることが多いのは周知の事実であろう。一方で、それを言い換えれば彼らが現代の価値や規範とは異なる“前時代の空気”の中に生きているとも言えるだろう。そのために、彼らの旨とする価値を抽出/考察する事とは、すなわち現代社会ではすでに失われつつある「近代日本の記憶」を研究するものともいえ、その意味において応援団とは学術的に興味深い対象と言える。そこで、本研究では全国各地の学校空間に残るバンカラ応援団文化を参与観察によって詳らかにし、近代日本で形成されて来た「日本人の身体とその表象」について考察することを目的とするものである。さて、本研究の対象となるバンカラ（文化）とは、明治期の旧制学校に端を発する価値とされ「外見に拘らず真理を追究する在り様」となり、学校空間に限らず、近代化の歩みの中で創造された近代日本文化や日本人像を知る上で重要な役割を果たすものと言える。ところで、その考察に際し全国各地の応援団を対象とするのには理由がある。それは周辺部が“過去”を残存させやすい傾向を持つからである。大都市など政治・経済の中心地では、社会の構成要素はその必要に駆られて常に最新へ変容せざるを得ない状況にある。一方で、いわゆる周辺地域では、その変容過程が緩やかであり、一度伝播された価値が定着し当該地域の文化として安定的に継承される傾向にあるといえる。そのために、明治期に定着した文化が、いわゆる地域の伝統として残存/継承される可能性が高いのである。したがって、日本各地の学校空間で実践されている応援団文化は近代期の価値の残滓である可能性が高く、本研究を考察する上で重要な存在となるのである。

２．研究の目的

上記に示したように、本研究は日本各地の学校空間で育まれ/継承されるバンカラ応援団文化から、近代日本人の身体観を抽出する事を試みるものである。たとえば、100年以上の歴史を有し、明治期の文化を色濃く遺す宮城県立仙台第一高校応援団などは注目に値する。一高応援団はいまだに袴に高下駄を身に纏い、独自の行動様式を受け継ぎながら活動しており、往時のバンカラ応援団文化を知る上でこの上ない研究対象となる。また、バンカラ応援団文化は、各学校内での生徒活動にも大きく影響しており、運動会などは単なるスポーツ大会ではなく「自校アイデンティティ」の形成に重要な役割を果たしている。たとえば、岩手県立盛岡第一高校では、運動会そのものが生徒の主体(自主)的活動により準備・開催されるものとされ、本校応援団はその活動の中核にあり、運動会を通して学校全体を動かす存在ともなっているのである。

そもそも身体とは社会における価値規範と直結するメディア(媒体)であり、多くの文化研究者がその中心的関心事に据えてきた。申請者もスポーツ文化人類学の研究者として右に同じであり、本研究では、学校空間で育まれ/継承されてきた身体観や身体技法の継承空間として応援団に注目し、そこで抽出された身体観や身体技法を体育・スポーツ科学分野の新たな視座として提供する事。そして、その成果を近代史など諸分野にも提供し、学際的な視点で身体文化研究に資する事も本研究の大きな目的となる。

３．研究の方法

本研究はスポーツ文化人類学の研究方法である参与観察、文献研究を通じて行われる。参与観察は現地での聞き取り調査、ビデオ、カメラによる映像・画像の記録を通して行われるが、応援団行事の調査・記録はもちろんの事として、彼らの日常実践における世界観やそれに纏わ

る身体への眼差しに関しても注視している。また参与観察にて収集したデータは単なる分析情報として扱われるのではなく、貴重なアーカイヴデータとして位置づけられ記録されている。ところで、参与観察は、日本各地の旧制学校に出自を持つ学校を中心に実施されたが、それら旧制の流れを汲む学校の多くは生徒による「自治」の意識が高く、また学校に受け継がれる伝統を重んじる傾向にあり、バンカラ文化や応援団はその空気と親和性が高い存在と言えるからである。参与観察では、事前調査として応援団活動の情報収集、歴史研究などを実施し参与観察において効率的に調査が行えるように準備を実施し、参与観察では、応援団関係者のみならず一般生徒を含む関係者へのバンカラ応援団文化に関するインタビューをICレコーダーにて保存、またビデオ・カメラにて映像・画像の記録を丹念に実施している。記録した諸データはHDに保存され、参与観察と並行しながらバンカラ応援団文化のアーカイヴが実施されている。参与観察後は、参考文献を渉猟し、先行研究の蓄積を加味しながら考察し、必要に応じて補充調査を実施している。

４．研究成果

本研究では、近代学校空間において創られ/護られてきた日本人の身体観を考察するためにバンカラ応援団の存在に注目し、全国に点在する応援団の参与観察を実施しその文化を通して「日本人の身体観の形成とその表象」に関する資料収集とその解明を目指した。研究の実施に際して、日本各地に残るバンカラ応援団文化の抽出の為にバンカラ文化が色濃く残る地域として有名な岩手県を皮切りに石川県、東京都、鳥取県、福岡県、大分県など応援団文化の色濃く残る各地の応援団を訪問し「応援歌練習、運動会応援合戦、夜間80km行軍、野球応援、相撲応援」などの参与観察を実施し、これらバンカラ応援団に特徴的な行事から、彼らの護り続けてきた意味や価値の抽出を行った。これら活きた資料を基に近世や近代以降の哲学、文化人類学の知見などとあわせて研究を進め、如何にして日本人が「学校空間における身体」を形成してきたのかその一端が明らかになり、それをベースとして、近代日本人が醸成してきた「日本人の身体観」への視座が詳らかになってきている。その成果はすでに学会発表や論文、著作においては一部発表され体育・スポーツ科学分野に提供され、また新聞メディアなどを通して一般社会にも還元されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 瀬戸邦弘	４．巻 1
２．論文標題 「肖る」という伝統文化の伝播過程－鳥取東照宮裸祭りにみる地域文化の構築過程－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 オシリスへの贈り物 The Offering to Osiris(吉村作治先生喜寿記念論集)	６．最初と最後の頁 92-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瀬戸　邦弘	４．巻 54(1)
２．論文標題 デイサービスというチチャーと島の記憶 ― 現代社会に護られる伝統綱引き行事―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 立命館社会論集	６．最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 瀬戸　邦弘	４．巻 20
２．論文標題 西大寺会陽と宝木争奪戦　「御福」を中心とする地域とその身体文化	５．発行年 2019年
３．雑誌名 スポーツ人類学研究	６．最初と最後の頁 7-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 瀬戸邦弘	４．巻 33
２．論文標題 創られる伝統的スポーツの世界　異在郷（ヘテロトピア）としての出雲駅伝	５．発行年 2018年
３．雑誌名 山陰体育学研究	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 瀬戸邦弘
２．発表標題 高校応援団の現在 応援歌練習、運動会にみる自治と伝統文化の継承
３．学会等名 日本体育学会第70回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 瀬戸邦弘
２．発表標題 応援団の空間とその世界観
３．学会等名 第7回高等学校応援団フェスティバルin静岡（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 瀬戸邦弘
２．発表標題 高校応援団活動の現在　応援団連盟活動を一例として
３．学会等名 日本体育学会第69回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 瀬戸邦弘
２．発表標題 高校、大学応援団とその世界観
３．学会等名 第1回大学応援団フェスタ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 瀬戸邦弘
２．発表標題 応援団が構築する学校文化-通過儀礼としての応援歌練習-
３．学会等名 山陰体育学会第57回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 瀬戸邦弘
２．発表標題 ドラマトゥルギーとしての応援練習-伝統校の歴史を紡ぐ応援団文化
３．学会等名 日本スポーツ人類学会第20回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀬戸邦弘
２．発表標題 西大寺観音院　会陽・宝木争奪戦における身体
３．学会等名 日本スポーツ人類学会大19回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 丹羽典生　瀬戸邦弘	４．発行年 2020年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 332
３．書名 応援の人類学	

１．著者名 寒川恒夫研究室編　瀬戸邦弘他	４．発行年 2019年
２．出版社 虹色社	５．総ページ数 289
３．書名 スポーツ人類学の世界　早稲田の窓から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

１．瀬戸邦弘研究室
http://setolabo.sakura.ne.jp/index.html
２．われら大学応援団　存続の危機がはぐくむ“愛”と“連帯”東京新聞　2019年10月8日
https://www.tokyo-np.co.jp/article/national/list/201910/CK2019101002100060.html
３．「応援団は男」今は昔　九州3大学に女性団長 西日本新聞 2019年6月17日
https://www.nishinippon.co.jp/item/n/519208/
４．はじまり考　応援団 旧制高校の対校戦から　読売新聞夕刊　2019年5月19日

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関